



元気通信

ブダペスト日本人学校

学校だより

平成28年 2月19日号

【学校長所感】(学校長)

3学期もあとわずか

月日の経つのは早いもので、3学期もあと1か月となりました。進学、進級するためのまとめの期間もあとわずかとなったわけですが、子ども達のご家庭ではどのように過ごしているのでしょうか。

学校では6年生を送る会である「ありがとう やさしい6年生の会」や卒業証書授与式に向け、歌の練習等に励んでいます。本年度は小学部の卒業証書授与式しか行われませんが、卒業生のために全校の児童生徒全員が一致団結して、温かい励ましの言葉と共に送り出して欲しいと思っています。当日は厳粛で心のこもった卒業証書授与式になるよう願っています。

ところで、2月6日の土曜参観日に配布いたしました保護者アンケートが全て揃い、その集計が出ました。結果を十分に考察した上で、また自由記述と合わせて来年度の具体的な取り組みを決めたいと考えております。本当にありがとうございました。尚、集計結果につきましては今月下旬に家庭数で冊子を配布いたしますので、ご熟読ください。

最後に、東京オリンピックが開かれる2020年度には小中高の学習指導要領が改訂されます。文科省は、現在、その内容について審議しているところですが、本校も文科省のHP等で情報を得ながら色々なことに取り組みたいと考えております。その際、保護者の皆様にご協力いただくことがあるかも知れませんが、どうかよろしくお願い申し上げます。



<門出の言葉の練習風景>



【避難訓練を終えて】(防災安全担当 佐々木)

2月9日(火)に避難訓練を行いました。火災時における避難経路の確認をし、放送や教員の指示を聞いて落ち着くということをめあてとして避難しました。1学期、2学期と不審者侵入時を想定しての訓練を行ってききましたが、今回の避難訓練ではより真剣な態度で臨んでいたことが印象的でした。日ごろから安全に対する心構えを持ち、自分の身は自分で守らなければならないという意識が、態度から見られたことを児童生徒に話しました。校長先生と大使館の隅田様から、火災時の避難の仕方について詳しい講話を聞き、『煙を吸わないようにハンカチを口と鼻にあてる。姿勢はなるべく低くして避難する』ということを学ぶことができました。



【おはなし会 小学部1・2年生】(1・2年担任 佐々木・大久保)

2月15日(月)の3時間目に、図書ボランティアのみなさんによる『おはなし会』がありました。今回の読み聞かせでは、「昔話」や「指遊び」、「パネルシアター」など、子どもたちの興味を引くお話や手法を使って、「本の世界」に触れさせていただきました。子どもたちは、真剣な眼差しでお話に聞き入ったり、指遊びの巧みに驚いたり、パネルにどんどん描きこまれていく絵を見て大笑いしたりして、「本を読む楽しさ」に触れることができました。また、実物のびゅんびゅんごまをいただいて、子どもたちは大喜びです。しばらくはびゅんびゅんごまブームが低学年を席卷することになりそうです。

「本を読む楽しさ」を様々な方法で表現し伝えてくださった図書ボランティアのみなさん、本当にありがとうございました。

【ありがとう やさしい6年生の会】(小学部職員一同)

2月25日(木)の5時間目に「ありがとう やさしい6年生の会」を実施します。これまでお世話になった6年生へ、1～5年生から感謝の思いを込めた素敵な会を贈れるようにと一生懸命準備を進めています。ドームにて実施予定ですので、お時間のある方は、ぜひご覧いただければと思います。

【授業研究⑥ 3・4年生総合・ドナウ生活】(授業者 甘利 研究部 林田)

「現地で大切にされているものに出会い、現地の人々の考え方に触れ、それらが子どもたちの中に生きる授業がしたい。」日本人学校の教員として派遣されることが決まった時、何よりも強く感じたことです。



「現地のものに触れる」ということについては、本年度は総合学習の中で、子ども鉄道の見学にはじまり、多くのゲストティーチャーに出会い、鎖橋を渡るところまで、たくさんの現地素材を扱った学習を展開することができました。本单元においても、鎖橋を渡る際に、「アイバーチェーンって想像より大きい!」「こんなに重いものを支えているから、支柱が太いんだ!」と、驚く子どもたちの姿の中に、「本物に出会う学習の価値」を感じました。

一方で、「それらが子どもたちの中に生きる授業」については、自信をもって「できた」とは、言いきれません。おそらく、本单元で学習した内容や、身につけさせた力の中には、生涯の知恵や力として子どもたちの中に生きることもあるのだと思います。しかし、そう断定できない大きな要因として、今回の研究授業における評価体制のあいまいさがありました。

ゲストティーチャーを前にして、どれだけ情報を集める力がついたのか。活動をまとめる際に、根拠をもって話す力はどれほど身に付いているのか。レポートでまとめる際に、その子の学びをどうとらえるのか。これら进行评估し、子どもの育ちを把握する体制を構築してはじめて、「ふれ合い」ではなく、「生きる授業」になっていくのだと思います。

来年度は各活動での評価方法を明確にし、出会ったものが「生きる授業」になっていくよう、もう一度一からしっかりと考えていきたいと思っています。(甘利)

今回は、本年度最後の研究授業であり、研究のまとめとして位置付けた授業でした。4月より進めてきた「一時間の中での学び合いをどのようにデザインするか」については、一定の成果が出てきていると考えています。そこで、今回はこれまでの成果である授業デザインをもとにして、「単元を通した学び合いのデザイン」について考えることが大きなテーマでした。同時に、地域素材を生かした教材開発の在り方を考える機会として捉えました。



単元を通して共通する問い「セーチェニ・イシュトバーンさんって、どんな人?」を持たせることで、学習のはじめと終わりで自分の考えがどのように変わったのか、子ども達自身でその変容をとらえることが出来ました。実際、学習のはじめのころはイシュトバーンさんについて「えらい人」・「有名な人」などと考えていた子ども達が、学習の終わりでは「ハンガリーを大切にしている人」・「ハンガリーを救った人」などの考えに変容しています。このような変容が見られたのは、その証拠となる事実や考え方にたくさん出会うことが出来たからです。

また、今回の授業では、ジュジャ先生と聴講生として来ていた若井さんのお母さんにインタビューをしました。このようなゲストティーチャーの活用は、証拠を増やす一つのきっかけとして有効に働きました。子ども達にとって慣れ親しんだ人の声を聴くことも、理解を促す効果があったと考えています。

今回の研究授業を通して、一時間の学習だけでなく単元を通して授業を考える視点を持つことの意義、そしてハンガリーならではの地域素材をどのように扱うか、この2点を職員間で共通理解することができました。これら2015年度の研究の成果をもとに、2016年度の研究へとつなげていきたいと考えております。